

関西農業史研究会報

No.22-1982.1.23

久しぶりに会報を発行します。半年近く休んでしまった申し訳ありません。昨年は10月に岡光夫・三好正喜編著『近世の日本農業』を発行することができました。幸い売行も好調で、一安心して居ります。また研究会活動も、6回開くことができました。以下の通りです。

- 1981.1.24 第34回 岡光夫 氏「幕藩制崩壊期の農業」 (8名)
- 4.25 第35回 高谷好一氏「水田の景観学的分類試案」 (11名)
- 6.6 第36回 米田賢次郎氏「中国古代の麦作について」 (8名)
- 7.11 第37回 飯沼二郎氏「福岡農法の成立について」 (12名)
- 11.28 第38回 斎藤政夫氏「近江牛文化について」 (7名)
- 12.12 第39回 内田和義氏「近世畿内における在郷町人 (8名)
の界隈」
本研究会も82年で40回を迎えました。1977年は6回、78年は7回、
79年は11回、80年9回、81年6回と細々ながら、6年目に入りました。
今年もよろしくお願い致します。

1981.6.6 第36回例会 (出席者8名)

米田賢次郎氏「中国古代の麦作について」
[報告要旨]

中国史において、水田地帯すなわち揚子江流域が政治経済

上の中には、早く見なす人でも大略隋の頃、普通には唐の中期以後のことといわれてゐる。されば中國文化は華北畑作の上に成立したものであり、日本と異質な農業技術、農村社会を基盤にして成立したといえる。

ところで、乾地農法の行われてゐる華北畑作地帯では、^第麦を主とする年一毛作、禾→麦→大豆(或は黍)→冬期休閑という二年三毛作型が一般である。この二年三毛作型の成立時期については、(1)春秋時代説(中国、勞幹氏、胡錫文氏)、(2)戦国末期説(米田)、(3)前漢中期説(韓國、閔成基氏)、(4)唐代説(西嶋定生氏)、(5)最近100年説(西山武一氏)等がある。これらうち、(1)~(3)は齊民要術(紀元630~650に亘り)、山東省泰山周辺の高田地帯を主たる対象とした農書で、現在の華北乾地農法の基本的な原則はすべて含まれると見られるレベルの高い農書)から二年三毛作が考えられるというに對し、(4)の西嶋氏は、齊民要術では、(1)麦田は下田に、禾は高田に栽培されることになっている。(2)麦の播種に先立つて五月六月耕起整地し(この作業は曠と呼ばれる)、麦の播種時まで裸地状態にておく、といふべて、二年三毛作は成立しないといふ見解である。西山氏は、『支那農業基礎統計資料』から考へれば、今世紀の山東省でも34%位であるから、普及度といふ点から見て、二年三毛作の確立と普及は最近100年のことといふざま

得ないとの意見である。

今回私は、(1)穀は五月六月(陰曆)の耕地・整地の作業ではあるが、麦の播種期まで裸地状態に放置する必要はない。(2)麦は下田に、木は高田に播種することも、一応の目安にすぎない」ということを論証し、更に齊民要術は節月(各月の節気の日をその月の朔日とした一種の陽曆で、例えば陰曆3月の節気にあたる清明節<太陽曆では4月5日>が3月朔日になるわけであるから、大体35日太陽曆をズラせばよい)を使用していふ点に着目し、齊民要術の各作物の播種期、收穫期等を太陽曆に計算し、早熟性禾—麦—大豆(黍)—冬期休閑の二年三毛作が充分成立するし、このように考えても、まだ要術の記事に支障する点がないことを述べた。

【討論要旨】

米田氏の報告は、1.二年三毛作の普及程度、2.暦の読み方、3.農書の読み方の三点を中心になっていた。討論もこの点に集中した。1.については 小以前の作付体系がまず問題にされた。一作一作か、混作ではなか、たかといふことである。また、アワムギ・大豆の連作は果して可能か、たか。作季としては可能である。6月中から8月末の集中的に降る雨による土壤侵食をいかに防ぐか。被覆作物としての疏肥が必要なのである。

※ なお、米田氏の中国農業に関する最近の研究として、下記の二論文があります。御参照下さい。

- 「漢六朝間の播種技術について」(鷹陵史学オフ号)
- 「陂渠灌溉下の稻作技術」(史林オ63巻4号、1981.5)

また、本報告については、「中国古代麦作考」(鷹陵史学オフ8号)が予定されています。

1981.7.11 第37回例会 (出席者12名)

飯沼二郎氏 「福岡農法の成立」

[報告要旨]

▶福岡農法の成立とのものとは何の関係もないが、はじめに福岡農法とのものの意義について記しておこう。

日本には、最近(1960年ごろ)まで「農業革命」がなかった。それが、西洋農業と異なる日本農業の特徴だ、という人がいる。ふとしきい意見だが、たとえば西洋農業の「農業革命」として最も代表的なイギリスの場合を考えてみよう。

イギリス「農業革命」は、18世紀から19世紀にかけての産業革命期に、非農業人口の急増による農産物(食糧)需要の急増にこたえるべく、ノーフォーク地方でそこなわれていたノーフォーク農法が、廻込法によて割りり出された個人主義的大農場のなかに普及していく過程である。

日本の産業革命は、1880年頃から1910年頃までに至る期間である。このとき、福岡地方でそこなわれていた福岡農法が、明治32年に制定された耕地整理法によて割りり出された近代的な(乾田化・整形化された)水田のなかに普及していく過程がみられる。(たかって、この過程を日本の「農業革命」として何らエレベーションかえないと考える。

ついでに、この福岡農法を西洋農学によって理論づけたものが、明治21年に刊行された権井時蔵の『耕作改良法』であり、このことが日本における近代農学の成立を意味するのである。

►さて、では、なぜ福岡農法の普及に耕地整理を必要としたのか。
それは、福岡農法は無床犁による深耕（いわゆる馬耕）を主要な
内容としていたからである。日本の農業の発展の過程を古代から
現在（今くとも1960年頃）まで辿ってみると、一貫して深耕・多
肥をふし進めてきた事がわかる。徳川時代に一般に用いられた犁
は長床犁であるが、深耕には不適であるから、江戸その他の大
都市近辺などで深耕しようとする時には、鍬や踏鋤によつた。
特に備中鍬の発明は、鍬による深耕を一層容易にすることと共に、また、
その事を普及させる事にもなつた。そのような中にあって、福
岡農法は犁（無床犁）によつて深耕するとこれに特徴がある。

►福岡地方で明治初年に水田の深耕に用いられていた無床犁は、
どのようにして外国から導入されたものであるか。或いは、福
岡地方にみつけて発明されたものであったか。福岡では、それは豊
臣秀吉の朝鮮侵攻の時、黒田軍が朝鮮から持ち帰ったものといふ
言い伝えがある。それを証明する資料は全くないが、どうやらそ
れが朝鮮から渡来したものであることを示していようにも思える。

日本における最古の犁は、近年疑問視されている島根県邑南町の六
世紀の古墳から出土したと言われる犁、また宮崎市の7世紀の古
墳から出土したと言われる犁を除けば、正倉院の子日手辛鍬である。
これは8世紀の中頃に天皇によつて宮中儀式に使われたとい
う確実な証拠がある。次いで10世紀の延喜式に記された宮中
菜園で使われた犁は長床犁である。そして以後、絵巻や農書に描

かけている犁は、すべて長床犁である。その反面、清水弔氏の日本における犁の発達は、無床犁から長床犁へ発達したといふ説が一般に信じられている。つまり、無床犁は長床犁よりも未発達のものといふ理解である。しかし、明治初年の福岡農法は、当時の最も先進的な農法であり、そこには使われていた無床犁が、当時一般に使われていた長床犁よりも未発達であったことは、どうも納得がゆかない。

長床犁は、華北において戦国期に成立した。そして、それ他のすべての鉄製農具と同様、朝鮮を経て日本に渡來した。それらが朝鮮を経過する時に多少なり朝鮮の風土に適合するように変形されたようだ（華北は年雨量500mm前後の乾燥地帯、朝鮮とくに南朝鮮は年雨量100mm以上の湿润地帯）、犁もまた乾燥地に適合的な長床犁から、湿润地に適合的な無床犁に変形されたようである。最近、朝鮮から出土した三国時代の犁は、研究者によると無床犁であろうと推定されている。（だから、正倉院の子日手辛鉄は、中国からではなくて、朝鮮から渡來したものであろう。）

以後、朝鮮においては、長床犁と無床犁が並用されていたらしく、たとえば日本下に朝鮮總督府から出版された『朝鮮，在来農具』にも、その他調査報告書の類（たとえば日本の農商務省から刊行された膨大な『韓國土地農産調査報告書』1905年）にも、長床犁と無床犁が並記されており、長床犁は木田用（浅耕用）、無床犁は畑地用（深耕用）とされていたようである。

▶なぜ、湿润な日本や朝鮮で、深耕用の長床犁が長く使用されたのか。

それは、一つには施肥量が少ない時には、深耕はかえて減収をもたらすこと、また長床犁のもう長い犁床が水田の耕盤を作ることに適していいた事によると考えられる。

徳川時代に对馬では、畠地に無床犁が用いられていた。そして明治初期に長崎県の大蔵部（要するに島でない所）でも、畠地に無床犁が用いられていたという。そこが考えられるのは、徳川時代における对馬藩の対朝鮮貿易である。徳川時代、唯一の国交關係のみ、たる朝鮮に対して、対馬藩は幕府から貿易を許され、対朝鮮貿易は年30万両に及び、釜山にはそのための役所をもつて、常時500人ぐらいいがとの役所で勤務していたという。したがって、このルートを通じて朝鮮の畠地用の無床犁が、畠地が多い対馬に入り、でであろうことは、容易に想像される。それが更に北九州に入り、たのであろう。このように考えると、上述の福岡地方における無床犁の渡来についての言ひ伝えも説明がつく。

徳川時代から明治初年にかけて、畠地の深耕に使っていた無床犁を、明治になり米の需要が増大し、水田の深耕多肥を考えられるようになつて、當時、福岡の一農民（今はなつては、その名を知る事ができないが）が水田に転用してみた、それが福岡農法の成立であったと考えられる。

※討論専旨は省略します。なお、飯沼先生の福岡農法の成立に関する最近の詳しい研究としては、下の二論文があります。
・「日本における犁の発達」（京大『人文学報』49号、1981.2）
・「福岡農法の成立」（『農業史研究会報』10号、1981.3）